



今回は、日本霊長類学会大会の報告です。

◇ 「コドモをとりまくゴリラの社会構造」をテーマに学会発表！

日時： 令和元年7月13日(土) 場所： 熊本市国際交流館 参加： 自然科学部霊長類研究班
内容： 雌雄2頭のコドモゴリラと他の個体との関わり方を追ひ、コドモの成長個体間関係の変化を考察する。

◇ 研究の概要



本研究は、東山動植物園のニシローランドゴリラ 5 頭の個体間関係の推移を通じ、個々のゴリラの成長過程や動物園の飼育環境下にあるゴリラ群の社会構造の特徴を明らかにすると同時に、今年で 5 年目を迎えた関高校の継続的な活動の一環として、貴重な動物園ゴリラ群の長期的データの確保に努めることも大きな目的としています。

東山動植物園のニシローランドゴリラ群は、オトナオス（シャバーニ）とオトナメス 2 頭（ネネ、アイ）、それぞれが生んだオス・メスのコドモ 2 頭（キヨマサ、アニー）の計 5 頭からなります。

具体的な観察手法としては、2 個体が半径 3m 以内に接近する行動を近接として定義し、一定時間内における近接、遊び、ドラミングの回数を、生徒がそれぞれ担当の個体を決めてチェック用シートに記録し、個体間関係に関する分析と考察を試みています。

今回は、2018 年夏の新ゴリラ舎完成に伴うゴリラの行動や個体間関係の変化に注目し、観察を行いました。新舎は旧舎と比べタワーやネットが設置されるなど、ゴリラの可動範囲が広がっています。その結果、「空間的制約による近接」が起きにくくなり、より正確に個体間関係を読み取ることが可能となったと、私たちは仮説を立てました。

引越し直後のゴリラの活動は不活発でしたが、最近は屋外タワーに登るなど活動的になっています。また、核オスであるシャバーニによるメス（ネネ）に対してのイジメ行為がみられなくなったり、シャバーニが以前にもましてコドモと遊ぶ姿が見られるようになったなど、ゴリラ間の関係にも変化があらわれはじめました。このことに関しては、環境の改善によるゴリラへのストレスの逓減があるのではないかと考えています。今後も 2 頭のコドモゴリラの成長を軸に観察を継続する予定です。

なお、本研究は、本校 SGH 活動の一環であり、中部学院大学竹ノ下祐二教授の助言を受けつつ進めています。



◇ 熊本高校生環境会議 2019 と中高生ポスター発表



12日(金)17:00より、会場の熊本市交流会館で、熊本県高校生環境会議が開催されました。研究者が話題提供者となって霊長類学の最新成果を紹介し、高校生と議論する画期的な催しです。

滋賀医科大学の西山勝夫先生から「ニホンザルとアカゲザルの交雑問題」、国立科学博物館の久世濃子先生から「森の哲人オランウータンと私達の暮らし」について講義をしていただき、そのふたつの問題に関し、熊本県の高校生がグループ形式でのディスカッションに参加しました。

人間と野生動物とのあいだにはどんな軋轢が生じているのか。野生動物と共存しつつ、豊かな生活を実現する方法はあるのか。熱心な議論が交わされました。議論の終盤、傍聴席で熱心に聴いていた関高生も意見を述べ会議に参加しました。

13日(土)、大会会場の一角で、全国から集まった高校生7チームによる発表が行われました。

ニホンザルの鳴き交わり(東洋英和女学院)、高崎山ニホンザル群、採食エンリッチメントとチンパンジー、ニシローランドゴリラ群の研究に混じって、ヒトを対象とした午睡と作業効率の関係や、コサギの採食活動など、興味深いテ



ーマが発表されました。

ふだんは地道な活動を行っている高校生にとって、学会での発表は緊張の瞬間です。研究者の方々から直接指導・助言をいただけるまとないチャンスであり、さらに高校間の交流によりたがいに刺激を与えあうこともできます。わずかな時間でしたが、次の研究に向けてスタートを切る絶好の機会となりました。

◇ 陸域生態系、生物多様性、絶滅危惧種、自然遺産の保全。すべてSDGsです。



関高 SGH 課題研究では、国連の SDGs を基準にし、テーマを設定を行っています。Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の 17 の目標の中には、ゴリラの棲む熱帯雨林の保全に関わるテーマも掲げられています。